「浜寺の由来とロシア兵俘虜収容所」

郷土史愛好家　七野大一

こんにちは。七野と申します。私は浜寺という地名の由来とロシア兵俘虜収容所の話をさせていただきます。私は研究家というよりも、歴史が好きで郷土資料に詳しい人だと思ってお話を聞いていただければと思います。最後までご清聴お願いいたします。

**１　浜寺の地名の由来**

今回浜寺公園150周年ということで、浜寺公園は元々何だったのか、なぜ浜寺公園になったのかをお話させていただきます。これは大正12年に高石の地元の有志が作った、浜寺の地域の由来について記した「濱寺之由来」という本になります。

橋爪先生の講演でもありましたが、150年前に住吉公園など神社やお寺の所有地が公園に変わっていったということでした。実は、現在浜寺公園がある場所も寺の所有地だったと記述に残っています。その寺の名前は大雄寺と言います。大雄寺があったのは今から約700年前、南北朝時代のころになります。後醍醐天皇の次の天皇である後村上天皇が三光国師という稀代の高僧にお寺を造らせたのが始まりです。天皇勅令のお寺であるので、七堂伽藍（しちどうがらん）といって寺として具備すべき七種の堂宇（どうう）が全て揃った、今でいう四天王寺や東大寺のような大寺院だったと書物に残っています。大雄寺があった場所は、高石神社のあたりから諏訪ノ森の先の船尾のあたりまでが大雄寺の土地だったと言われています。旧26号線沿いの夢一喜というステーキハウスがあるあたりから出土物が発見されており、そこに本堂があって、そこから北の方に土地が伸びていたのではないかと言われています。そのため浜寺公園自体は、もともと大雄寺の土地の中にあった公園だったのかもしれません。

なぜ大雄寺がそこにできたのかというと推測になりますが、大雄寺の前には別の寺があり、その寺を改築して南朝型の大雄寺ができたそうです。浜寺公園から南に芦田川がありますが、そこは鎌倉時代後期・南北朝時代は港だったと記録に残っています。海外の陶磁器などが出土していることから物流の盛んな場所だったと推測でき、海の拠点にということで大寺院を建てたのではないかと思います。なぜお寺が拠点になるのかというと、昔のお寺は今と違い僧兵を置いており、戦があれば出兵する城のような役割を果たしていたからです。

　次に海の拠点である大雄寺と浜寺という名称の関係についてお話します。南朝型の寺は吉野に御所があったのですが、その吉野に日雄寺という寺があったそうです。日雄寺は通称「山の寺」と呼ばれており、それに対して大雄寺は「浜の寺」転じて「浜寺」と呼ばれるようになったと言われています。明治６年に公園名を決定する際にその通称を採用したのではないでしょうか。というのも今も浜寺という住所は存在していますが、住所自体は浜寺公園ができた後につけられたものであるので、住所よりも前に浜寺という名前、公園名があったのではないかと思われます。

大雄寺は南北朝時代の後も存続していたみたいなのですが、応仁の乱などの戦火で次第に衰退していったと言われています。ただ橋爪先生のお話にありました山川七左衛門が所持していた江戸時代の古地図には、高石神社が記載されており、その横には大王寺という寺が描かれております。発音が非常に似ており、何らかの形で、大雄寺から大王寺という名前に変わったのではないかと思います。現在も高師浜一丁目には大王寺というお寺があり、大雄寺の流れを汲む歴史ある寺院と思われます。

ちょっとした逸話になりますが、海の拠点となっていた大雄寺ですが、電話もなく文は人が歩いて届けないといけない南北朝時代で、一日で吉野の通達を浜寺の大雄寺までお知らせする方法があったそうです。まず吉野で狼煙を挙げたら、次に千早城がある千早赤阪村で狼煙を上げる、そして次に堺の南区豊田にある小谷城が狼煙を上げて最後に大雄寺に知らせるという方法があったそうです。そのようにして大雄寺のある浜寺と吉野が密接に繋がっていたと言われています。

この写真は大雄寺の石碑ですね。元々は先ほど出てきた夢一喜のあたりにあり、そこから移動を何度か経て、夢一喜から正面に伸びている道でキャラバシ遺跡があったあたりに建っています。横には「後村上天皇勅　三光國師開基　濱寺奮跡」と書かれた石碑もあり、まさしく浜寺に大雄寺を建てたという史跡になります。ちなみにこの石碑から一分ぐらいのところに私の家があり、凄く縁があるなと思っています。

**２　ロシア人俘虜収容所**

次は浜寺公園が開設された後の話になります。日露戦争の際の浜寺俘虜収容所の話です。明治37年に日露戦争が始まりますが、その時に日本に連行されてきた俘虜（捕虜と同意）のロシア人を収容する施設として俘虜収容所が日本各地に建設されました。有名なのは松山の俘虜収容所ですが、一番多くロシア人俘虜が収容されたのは浜寺俘虜収容所と言われています。

場所は正確には浜寺公園の中ではなく、浜寺公園の南側の芦田川の辺りから高石高校がある辺りまでが浜寺俘虜収容所でした。地図でいうとこのような形です。当時、明治38年頃の高石村の人口は約3500人だったのに対して、連行されてきた俘虜は約2万8000人もいて、高石村の人口の何倍もの俘虜が連れてこられたということになります。そのため地図のとおりたくさんの建物が並んでいます。

この時、日本国としてはいくら敵国の俘虜であっても人道的な扱いをすべきだということで、収容所から高石村へも入って来られるように塀もなく、自由に暮らせるようにしていたそうです。当時、高石村の人々との交流があったそうで、敵国の俘虜にも手厚い待遇を用意する日本人の武士道精神に感銘を受けた俘虜もいるという逸話を聞きます。

少し面白い話を紹介します。これはクワスという飲み物の写真です。ロシア製のお酒で、ビールに近い飲み物だそうです。アルコール度数はそんなに高くなく、微炭酸のお酒で、これを俘虜たちが収容所内で作り、高石村の住民に振舞ってくれていたそうです。ある高石村の住民がクワスを自分たちで生産して一儲けしようとしましたが、結局日本人の口には合わず全然儲けられなかったとう話が残っています。

先ほど橋爪先生のお話の中で南海土地が浜寺公園の近く、今でいう高師浜2丁目、４丁目の周辺の区画整理をした話がありましたが、その前に実はこの俘虜収容所の地図のとおり、収容所が並んでいた配置が元になって浜寺周辺が整理されたのではと言われています。現在浜寺公園の南側入り口から伸びる通りは、芦田川をこえて高石高校まで続いていますが、今は海岸通りと言われています。この海岸通りは一枚目の収容所の写真に映っている通りかと思われますが、現在でも私より少し前の世代の人はこの道をロシア道と言っています。

高石村民にとってはロシア人俘虜収容所ができたことはかなり大きな出来事でした。高石市は和泉の国でいうと泉州の最北端に当たるのですが、昔を重んじるよりも新しいものや海外のものを取り入れる住民が多いイメージがあります。それはひょっとすると、ロシア人俘虜収容所の時代に、珍しい白人の方からいろんな話を聞いて柔軟な姿勢が身についたからではないかと思っています。

ご存知の方も多いと思いますが、浜寺公園内の羽衣青少年センターの前に日露友好の像が建っています。ロシア人俘虜収容所があったが、同時に日露友好の証として建てていると刻まれています。

これは２０１０年に「希望の花」というタイトルで、ロシア人俘虜収容所時代の話をアニメーション化しました。ストーリーはロシア人俘虜が地域住民と繋がって友好的な関係を築いていたという話になっております。高石商工会議所青年部が作成し、私は原画を担当させていただきました。

浜寺公園ができるさらに前の話でしたので、中々写真がありませんでしたがお伝えしたいのは、浜寺公園ができる前には歴史的なお寺があり、その名残で浜寺という名称が残っているということです。ご清聴ありがとうございました。

（画像元：七野氏発表資料　※無断転載を禁じます。）